

今ナキウサギを守らなければ

いちかわ・としみ
1951年 富山県に生まれる。
中央大学法学部法律学科卒業
法律事務所勤務
95年7月 ナキウサギの絶滅の恐れについて危機感を感じた女性7人でナキウサギふあんくらぶを設立。同くらぶ代表として、ナキウサギ保護のために活動。

市川利美

ふあんくらぶの発足

二年前の夏、白樺峠からヌブカの里へ実際に歩いてみる機会があった。いわゆる土幌高原道路の予定ルートでの現地調査に同行させてもらったのである。

白樺峠から、年代を感じさせる見事なトドマツの林を歩く。尾根を越え、さらに、森の中を進む。霧の中に、今が盛りのハクサンシャクナゲの花がふぁっと浮かび上がってきた。と、突然、ピーツという声が響く。初めて聞くナキウサギの声。わずか十五cm前後の小さな体から、どうしてこんなに大きな声が出るのかと思うほど、その鳴声は森の中に響き渡った。

そして、「ここがナキウサギの住み家です」と案内された岩場は、私にはこの世のものとは思えないほど、神秘的な空間だった。大きな岩が積み上げられ岩の舞台のようになっており、ハイマツやイソツツジ、そして、白や赤や緑のハナゴケやミズゴケが一面を覆っている。このミズゴケのジュウタンは水をたっぷり含んでいて、足をのせると体が思いきり沈みこんでしまうほどフカフカなのだ。ここだけが、まわりの森と根本的に違う、異次元の空間。こんな空間があるからこそ、ナキウサギたちは水河期から生き続けてきたのかと納得できる。ここは、彼らの聖なる地。アイヌたちが、「クローンカムイ（岩場の神様）」と呼んだのも、うなずける。

だから、私は二年間、この日は胸に秘めていた。だれにも、荒らしてほしくない。私の足で踏み込むのももうやめよう、ひそかにそう決めた。しかし、二年後の一九九五年の夏、私は考えを



ナキウサギ（恩田なおみ氏提供）

一八〇度転換させなければならなくなった。五月に、環境庁が土幌高原道路を通すことに事実上のゴーサインを出してしまったからだ。然別湖周辺はナキウサギの一大生息地である。そんなところに道路ができると、ナキウサギたちはやがては絶滅してしまうだろう。ましてトンネルを通すなんて、とんでもない。そんなことになってしまいう前に、多くの人にナキウサギのことを知ってもらわなければならない。もし人々がそれを知れば、この道路計画も簡単には進んでいかないはずだから。ナキウサギを守ろう。

七月三十一日、ナキウサギふあんくらぶは発足した。最初は女性七人、それから全国の女性一五名がまたたく間に呼びかけ人になった。北海道の大自然とそこに住む生き物たち、とりわけナキウサギを愛する想いが一つに重なりあっていくの

に、時間はかからなかった。

私たちは、もの言えぬ彼らのメッセンジャーである。現在メッセンジャーは、七〇〇人を超えた。彼らの姿を知ってもらおう大きなサイズの絵はがきも、二〇〇セット以上普及している。そして熱いメッセージが次々に送られてきた。

『雑誌「しんら」の十月号でナキウサギのふあんくらぶがあると知り、びっくり！あ〜んど、だいかんげき♡してしまいました。：略。：しかし何と云っても「氷河期からの生き残り」という生命力の強さにすっかり魅了されてしまったのです。それなのにああ何ていうことでしょう。その地球生命の長老ともいべき人生の達人を、人類が！



ナキウサギの生息地(風穴)

私たちが！
この手で絶滅させようとしている
なんて！
略。：地球全体のことより、個人の利益を優先させる時代はもう終わったはずですよ。』
（兵庫県Aさん。メッセンジャー
四六一匹目）

氷河期の生き残り

ここで、ちょっとナキウサギの紹介を。ナキウサギのことは、世界的にもまだ知られていないことが多いようだ。その研究者も、日本には二人しかいないという。帯広畜産大学の小野山敬一先生がその一人である。共著で北海道自然保護読本『動物と私たち』（北海道自然保護協会発行）によると、ナキウサギは、ウサギ目・ナキウサギ科。でも、耳が丸くて短いのので、「モルモットに似ていますね」とか、「ネズミですか」といわれることも少なくない。地球上に十八〜二十五種いて、エゾナキウサギはその中のキタナキウサギの一亜種である。日本では北海道にしかない。彼らは、氷河が到達して海面が下がり、宗谷海峡が陸続きになっていた三・五万から四万年前に、アジア大陸から北海道に渡ってきたと考えられている。そして、その後、氷河が北へ後退していった後も生き残ったのである。

住んでいるのは、こんな所

ナキウサギを訪ねるエコツアーを企画したのは、一人でも多くの人に愛らしいナキウサギを見てもらいたい、生息環境を体験してほしいと考えたからである。

ツアーは九月と十月の二回である。その内容はおおよそこうである。

初日は、札幌から層雲峡を経て大雪山国立公園内の十勝三股に出る。ここにもナキウサギはいる。しかし、数は少ないようなので、ここでは「風穴」

「永久凍土」を観察してもらう。

ツアーに参加し講師役もやっていた佐藤謙先生（北海学園大学・北海道自然保護協会副会

長）によると、風穴とは、「斜面の下方に堆積した岩のすきまから、夏でも冷風が吹き出し、周囲と比べて地温や地表温度が異常に低くなる場所」だそうである。北海道の風穴では地下に氷（永久凍土など）が見つかることが多いとのこと。

私たちは皆、実際にトドマツの根元の地面の穴の中に手を入れてみた。穴の奥が深いのでこわごと、それでも肘くらいまですっぽり入れてみると、ひんやりする感じだ。まさに自然の冷蔵庫。

佐藤先生が計った地温は、穴の入り口が〇・九度、少し離れた道路の地温が約十度。穴の中はとても冷えている。それでも秋というのは夏の間地下水が溶けているので、さほど地温差がない季節とのこと。

そしてまた、この付近の地面もやはり、湿地でもないのに、水をいっぱい吸ったふかふかのミズゴケにおおわれている。これは永久凍土層がある証しだそうである。

ところで、十勝三股の永久凍土がまだ知られていなかったとき、斜面を崩してここに林道を作った。このため凍土が溶け出し土砂崩壊させ、斜面の一部は乾いたガレ場になってしまった。今はそこにアカエゾマツが、倒れたり傾いたりして無残な姿をさらけ出している。やがて、この斜面全部が乾ききってしまうかもしれない。ちなみに、こんなふうには永久凍土層の上に立つ樹木が、氷が融けるとともに、あっちへ傾いたりこっちへ傾いたりしているのを「酔いどれの森」というそうである（小野有五著『北海道の自然史』）。

永久凍土層に道路を作るとどうなるか。ここは、永久凍土層破壊の貴重な教科書ともいえるべき場所である。だが、そんな教科書は一つで十分。二度

と作ってはいけない。

二日目は、然別湖周辺のナキウサギ生息地を二ヶ所見る。その一つである東雲湖は、ひそかに水をたたえた小さな美しい湖。この湖を見おろすように、ナキウサギたちの住むガレ場がある。しかし、今年に入って彼らの天敵であるエゾクロテンが現れて、ここではなかなか姿を見ることはできない。

私たちが彼らと出会ったのは、もう一つのガレ場である。ナキウサギとは、そう簡単に出会えるものではない。大雪の山々を縦横無尽に歩き回る山男たちでさえも、そうは出会っていないのである。でも、私たちは、見てしまったのである。彼らもぐもぐと、それはおいしそうに草（ヒメノガリヤス？）を食べ、赤い実（コケモモの実？）を食べているところを。彼らが食後のまどろみか、



ゴゼンタチバナを食べるナキウサギ

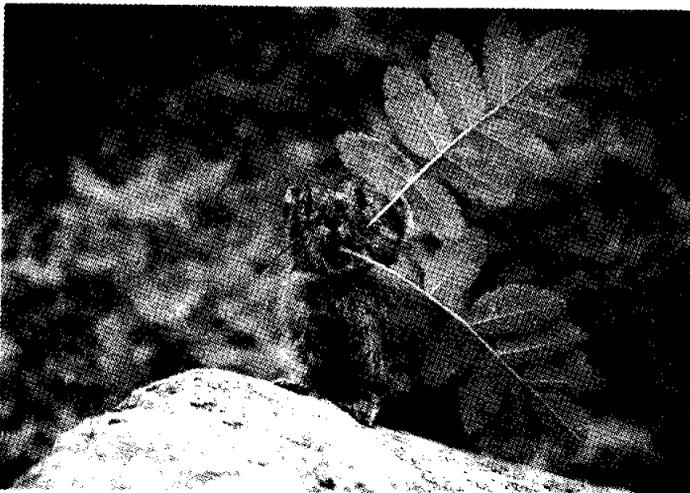
はたまた噂の瞑想ポーズをとっているところを。そしてまた、彼らは岩の上に座ってまっすぐこちらを向き、じいっと私たちを見つめたのである。つぶらな瞳…。穏やかな顔つき…。きっと、ポクたちを守ってといたいいんだよね…。そのとき、私は胸がどきどきして、心の中でいっばいつぶやいた。「だいじょうぶ。だいじょうぶ。必ずみんなで守ってあげるからね。」

ガレ場で私たちは彼らを驚かさないように、息をこらし声をひそめていたのだが、彼らと出会ってからは、あまりの感動に声も出さず息もできないほどだった。そしてガレ場を出た後も、ことば数が少なかった。

これは、二回目の十月のことである。九月にも八割の参加者が彼らを見ることのできたが、十月には全員が彼らの姿をまぶたに焼きつけることができたのである。

ただし、喜んでばかりはいられない。ここには高価な望遠レンズのカメラをもったカメラマンがたくさん来ており、中にはマナーの悪い人もいる。ヒマワリの種が落ちていた。これはシマリスの餌である。ナキウサギにも同じことをしているとも聞いた。聞きたくなかった。見たくなかった。やりきれない。でも、事実。

このあたりのナキウサギ生息地には、必ずインツツジ、ガンコウラン、コケモモがある。なぜ、標高八〇〇から一〇〇〇メートルの地点にこれら高山植物が育っているのだろうか。これはとてもミステリーであるが、答えは、もうわかる。「風穴」「永久凍土」である。



ナキウサギふぁんくらぶ作製絵ハガキ・1セット2枚(3種類)の中の1枚

「士幌高原トンネル」は無害か
ところで今回、問題となっている道路について「トンネル案」が浮上し認められようとしている。トンネルなら、草木や動物を害することがないというのである。とんでもない！トンネルは余計に危険である。

トドマツ、アカエゾマツばかりでなく、コケモモなどの高山植物もみな酔いどれてしまい、風穴の破壊と森の死で気温が上昇するから、ナキウサギは生きていけなくなるのだ。先ほどの小野山先生によると、ナキウサギの生息適温は十二度前後。アメリカナキウサギの場合、低標高地において太陽にさらされたままだと六時間後には死亡してしまふそうである。

そして地元で研究している関尾憲司さんも警告する。「十勝平野からの上昇気流が土幌高原の山腹をはい上がり、それが風穴からの冷気で冷却され、霧となって然別湖へ流れ込んでるのである。この霧が神秘の湖、然別湖のイメージを創り、かつ苔のじゅうたんと原生自然を支えていることを忘れてはいけない。トンネル建設は然別湖をただの湖へと変えていく推進力である。ここまですて土幌町は道路を然別湖へ連結させないといけないのだろうか」と。

昨年、北海道新聞社が十勝管内の住民に行なった世論調査によると(十一月一日付道新)、「必要と思わない」が四十%、「必要と思う」(二十四%)を上回った。そして、その理由のトップ(五十八%)は、自然環境、およびナキウサギの生息環境破壊である。

身近な自然の一番の守り手は地元である。その地元住民が、車窓からの景色の美しさだけを売り物にする観光に、ノーという判断を下したのである。車をとばして短時間で目的地に着くことよりも、ナキウサギの声を聞きながらトドマツの森を歩き、澄んだ冷たい空気を吸うことが、人々にとってどんなに大きな喜びとなりうるか。

素直に感動できる原生自然、こんな財産もっている地域は北海道でも残り少なくなってきた。だから、土幌町が自分たちの財産に誇りをもって、その美しさと希少性を永久に残していける町であってほしい。そして、それに応えうる道政であってほしい。

ナキウサギを天然記念物に

文化庁や環境庁などのお役所に電話すると、当初は「予算の関係で調査ができていません。」という返事。それが最近は、「かわいいからというだけでは天然記念物にはできないのです。希少性のあるネズミやコウモリもたくさんいるんですから。」という論調になっている。同じ時期に同じ言い方をされると一種の『ナキウサギふあんくらぶソフト』がしかれているかと思ってしまう。

ネズミやコウモリおおいにオーケー。希少性のあるものは、そのつど保護の手をさしのべていかなければ、そのうち日本のほとんどの生き物が絶滅危惧種としてかろうじて生き延びているということになりかねない。でも彼らお役人は、真剣にネズミやコウモリのことを考えてそう言っているわけではなさそう。そしてそれが問題だと思ふ。

昨年十一月、夕張岳が天然記念物に指定されたというニュースに、飛び上がらんばかりに喜んだ。しかし、それもほんの束の間。森林帯とナキウサギがはずされているからだ。天然記念物の指定にはそれ自体の貴重さ、希少性だけを基準に判断すべきである。でも、日本の環境行政は、はっきり言って恣意的である。他の省庁や地元に使って、本来の自分たちの仕事を忘れている。

アメリカでは、テリコダム判決という最高裁判決がある。スネール・ダーターという小魚を守る必要があると判断したら、たとえ工事が八十%完成し、すでに七八〇〇万ドルの工費が投じられたダムであっても、建設は差し止められるのだ。日本にもそんな思想が芽生えてくれたら、どんなにいいだろう。

先程のAさんの手紙の続きを。『たった一羽になってしまった高齢のトキにムリヤリ子供を作らせようと必死になる前に打つべき手はあったはずです。ナキウサギをその二の舞にさせないために、今！手を打たなくていつ打つつもりなのですか。道庁の人達がどうか未来を考える人達であってほしいと祈るばかりです。』

ファンクラブでは、これからやりたいと思っていることがいっぱいある。ナキウサギの実態調査、ナキウサギのリーフレット作成、写真展、ナキウサギのつどい；等々。ナキウサギを絶対に絶滅させないために今後さらに皆さんの知恵と力と時間をお借りして、できることから、楽しく取り組んでいきたいと思っています。